

■ 今後しばらく、市場の関心が最も強まるのは日銀の動き

大手格付け会社フィッチ・レーティングスが米国債の格付けを1段階引き下げたことについて、大方の市場関係者は「影響は軽微に留まる」と見ている模様。むしろ、日・米の株式マーケットにおいて目先「利益確定の格好の口実」にされたという印象の方が強い。

ただ、米国債の格付け引き下げという事実を「単に、民間の一格付け会社による独自の判断」などと軽視することもできない。今回の発表について、メディアは「唐突」、「不意打ち」などと伝えているが、そもそも「何故、このタイミングだったのか」、「格下げ判断の決め手は何だったのか」などという点については、今後じっくり究明して行くことも必要であろう。

フィッチ・レーティングスに言わせれば、おそらく「市場は米国の財政事情を甘く見過ぎている」ということなのであろう。実際、この日は米財務省が市場予想を上回る8~10月の国債発行計画を発表したことが市場で話題となっていた。

とまれ、米国債の格下げを受けた市場では、全体にリスク回避的なムードが広がったことで、むしろドル買いが優勢になるという皮肉な展開も見取れるようになっている。

もちろん、米国債の大量起債というネタや昨日（2日）発表されたADP全米雇用報告において事前予想を大きく上回る雇用者数の増加が確認されたことなどにより、米10年債利回りが足元で一時4.12%台まで押し上げられたこともドル買い材料。ことに、ADPの結果は明日発表される7月の米雇用統計の結果に対する強気の見方を増長させやすく、引いては足元で消滅しかけている「9月米（追加）利上げ」の可能性を再浮上させかねない要素として無視はできないものと言える。

なお、足元のドル強気の流れはドル/円を再び21日移動平均線（21日線）の上方に押し



上げており、目下は6月高値から7月安値までの下げに対する78.6%戻しの水準まで値を戻す展開となっている（左図参照）。

前回更新分の本欄でも述べた通り、このところのドル/円の値動きは極めて「テクニカルに忠実」なものとなっている。

振り返ると、前週末28日に日銀会合の結果を受けて大きく上下に値が振れた場面でも、同日の安値は89日移動平均線（89日

線）と一目均衡表の日足「雲」下限にガッチリと支えられ、切り返して大きく値を戻してからは21日線と日足「雲」上限が位置するところを再確認しに行くような動きとなった。

その意味でも、78.6%戻しというドル/円の現在水準は当面の上値抵抗として機能する可能性も十分にある。仮に、ここで戻り一巡から反落という展開になれば、まずは日足「雲」上限の水準を試すと見ておけばいいだろう。

一方、ユーロ/ドルは弱含みの展開を続けており、昨日は89日線を試す動きが見られている。同線が位置するところは、7月初旬の安値から直近高値までの上げに対する78.6%押しの水準とも一致しており、ここは当面の下値サポートとして意識されやすい。切り返す動きとなれば、あらためて1.10ドル処を試す動きとなろうが、あくまで上値余地は限られると見られる。

（08月03日 10:05）